

江戸川乱歩旧蔵関西新派上演台本『陰獣』 翻刻と解題

後藤隆基

江戸川乱歩の小説が舞台化されたのは、一九三二年七月、歌舞伎俳優の二代目市川小太夫による『黒手組』（小納戸容脚色・演出）をもつて嚆矢とする。二代目市川猿之助の春秋座を脱退した小太夫は、自身の劇団新興座を旗揚げし、第一回興行（帝国劇場、七月二十六・二十八日）のラインナップに同作を組みこんだ。脚色・演出を担当した小納戸容とは、コナン・ドイルをもじった小太夫の筆名である。乱歩は「原作のつたないこと、甚だ芝居に不可な事を知りながら、上演者が小太夫氏であるが、為め少なからぬ興味を以て、脚色上演を快諾した。脚色については、仮令原作を犯しても舞台の生きる様、思ふ存分書き改められる様お願ひして置いた」（「原作者の言葉」初演筋書）と自由な脚色を認めており、小太夫に対する期待と信頼がうかがえる。

翌年十二月、新興座は乱歩原作の第二弾として『陰獣』（小納戸容脚色、早瀬巨演出。脚本は『ぶろふいる』一九三三年九月十一月）を新橋演舞場で上演する。早瀬巨も小太夫の変名。甲賀三郎が「この作品が劇化されようとは、誰しも予期しなかつたであらう。一見それは至難の事に思へたからである。然るに最近市川小太夫君が、見事それを劇化して、成功に近いものを演出した。小太夫君の勇気と努力とに敬服せざるを得ない」（劇化された陰獣）『読売新聞』一九三三年十二月二十一日」と賛を送ったように、探偵小説界、演劇界で好評裡に迎えられた。

このとき新興座に特別加入し、小山田静子を演じたのが新派の女形、

梅野井秀男である²⁾。地方回りを経て名古屋で活動していた無名に近い役者だったが、一九三二年十一月の前進座第二回公演に参加して、東京劇壇に初進出を果たしていた。同時代の『陰獣』評をみると、梅野井は「小太夫によく調子を合はせ、淫蕩な性情を充分発散させて、存分に興味を持たせ、そして同座にいる女優たちの遠く及ばないものを見せた」（ぶんご「久方ぶりの新興座——新橋演舞場にて——」『演芸画報』一九三三年一月）などと高評されており、その壘惑的な演技態の一端が垣間見える。その後、梅野井は、前進座創立二周年興行（浪花座、一九三三年七月）への特別加入などを経て、一九三四年一月に都築文男、山口俊雄、汐見洋、五月信子、瀧蓮子らと「混成旅団劇」（安部豊「初関西の芝居見物」『演芸画報』一九三四年二月）とも呼ばれた新派の一座をあらたに組織し、角座に出演した。やがて「関西新派」の呼称も用いられる一座は、旗揚げ興行といふべき角座で、新興座と異なる台本（岸井良緒脚色）の『陰獣』を上演した。本稿で紹介するのは、この大阪で上演された『陰獣』の台本である。

乱歩の『貼雑年譜』第二巻を見ると、「昭和九年正月大阪角座ニテ梅野井ノ主役ニテ再上演。コノ時ハ小太夫トハ別ユエ座附作者岸井良緒トイフモノガ改メテ女形主役ノヤウニ書キ直シテキル。ソノ台本ヲ送ツテ来タノガ袋〔自作が劇化上演された台本等を整理した封筒——引用者注〕ニ残シテアルガ、変ナ不快ナモノデアル」と厳しい批評がみえる。『探偵小

説四十年」(桃源社、一九六一年)の「昭和九年度の主な出来事」にも「梅野井秀男一座、小太夫のとは別の妙な脚色にて『陰獣』を上演す」とある。このとき実際には梅野井は出ず、小山田静子を五月信子、寒川を都築文男が演じていた(「初関西の芝居見物」前出)。脚色者の岸井良緒(本名・岸井良雄)は、良衛の名前でも知られる、岡本綺堂門下の劇作家、演出家。一九三三年から大阪松竹に所属し、その最初の仕事が関西新派での『陰獣』の脚色であったという(岸井良衛『ひとつの劇界放浪記』青蛙房、一九八一年)。

では、以下に本資料の基本情報を記しておく。資料番号R11-2-1冊。袋綴。表紙に「江戸川乱歩原作／岸井良衛緒脚色」「陰獣 全三幕六場」と墨書き。左下部分に「昭和九年正月興行／大阪角座／女形 梅野井秀夫／主演」、上部に「角座 9、1月」と、いずれも乱歩自筆のメモがある。本文は、中央に「松竹興行株式會社」とある罫紙(縦罫のみ。二十行)で、左下に「正耕社謄寫(電話南五八四三番)」と印字された謄写原稿である。各丁の左上に丁数が記されている。全七十六丁。本文は七十五丁オモテまで。二十丁オモテから筆跡が変わっており、筆耕者の交代があったと思われる。

本資料の具体的内容については稿を改めるが、原作はもちろん、市川小太夫(小納戸容)脚色版との比較等を通して『陰獣』の劇化やその上演の様態等について検討したい。

注

- (1) 江戸川乱歩『貼雑年譜』第二巻に貼付された初演番組に拠る。
- (2) 梅野井秀男については、拙稿「昭和初期の関西新派と梅野井秀男」(細井尚子編著『東アジアにおける舞台性大衆娯楽のグローバル化を巡って』論文集)立教大学アジア地域研究所、二〇二三年三月)、

「新派のアクチュアリティと探偵劇の系譜——明治期『都新聞』の「探偵実話」から江戸川乱歩と横溝正史の劇化に及ぶ」(上田学・小川佐和子編『新派映画の系譜学——クロスメディアとしての「新派」』(森話社、二〇二三年)を参照されたい。

【凡例】

- 一、立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター蔵本を底本に用いて翻刻した。
- 一、異体字・旧字体は通行の字体に適宜改めた。
- 一、底本には丁数の記載あり。丁移りは、その丁の表および裏の末尾において、丁数と表裏の別(オ・ウ)を「」内に示した。
- 一、句読点の判別し難い箇所は、読みやすさと文意が通ることを考慮して、適宜句読点の別を選択した。また、句読点がない場合、私に句読点を付した箇所もある。
- 一、見せ消ちされた文字は二重線を付し、塗りつぶされた修正箇所は■で示した。なお、挿入箇所は「」で示した。
- 一、明らかな誤記等には適宜「ママ」とルビを付した。
- 一、せりふやト書きの間などをしめす記号は、ダーシや二点リーダー、三点リーダーが混在するが、ここでは原則として原本の表記に限りなく近い形を用いた。
- 一、字間および行間は適宜調整した。

【翻刻】

「江戸川乱歩原作
岸井良緒脚色

陰獣 全二幕六場」

陰獣 全二幕六場

梗概

変態小説家大江春泥が小山田静子夫人の事を辛辣に素つ破抜いた小説を描いた。それによると静子の動静が鏡に映したやうに書かれてある。必ず天井裏に潜んで彼女の一举一動を盗視したものに違ひないと思はれた。そして春泥とは静子に裏切られた昔の恋の復讐をするといふ手紙さへ届いた。静子は恐怖に戦たたかいて小説家寒川〔二オ〕久に一切を訴へ同情を求めた。寒川は行方不明となつた春泥の居所を捜す傍ら名探偵振りを發揮して真相を掴まうとしたが能はなかつた。それはその筈である。春泥とは静子の替名で彼女が寒川に接近せんための魂膽であつた。然し此の濁つた恋は成立せず彼女は自らの肉体をも諦めて了つた。〔二ウ〕

江戸川乱歩原作

岸井良緒脚色

陰 獣

全二幕六場〔二オ〕

※余白〔二ウ〕

場割

第一幕(一) 大江春泥の家の前

(二) 寒川久の書齋

(三) 三越の屋上

第二幕(一) 小山田の家

(二) 吾妻橋下の汽船発着所

(三) 小山田の家

人物

小山田静子〔三オ〕

大江春泥夫人

寒川久

本田寿夫

青木運転手

小山田の女中

寒川家の女中

モダン・ガール二人

菌入屋

菌入屋の女房

近所の女房二人

巡査三人

医者

糸崎検事

刑事二人

駄菓子買ひの子

スベリ台の子三人

買物の母と子

新聞の売り

汽船の乗客

弥次馬大ぜい〔四オ〕

※余白〔四ウ〕

第一幕

(一) 大江春泥の家の前

舞台の中央より、や、上手より到大江春泥の家、(家とは云ふもの、この辺は単に名ばかりで、玄関の隣りに、隣家の台所が並んで見え、台所の隣りには、また玄関と云つたやうな、向島須崎街の貧民窟のバラツク長屋。所謂太陽のない街の露地の片側である。

春泥の家の玄関の上手は隣家の台所で「五オ」見切つてあつて、下手は、春泥の家の台所、それについて下駄の齒入屋の店、ついで駄菓子や、貸家札の張つてある家など。

春泥の家の台所の前には、共同水道がある。貸家の前には干物掛けに、干物がしてある。

春泥の家には、「病中面会謝絶」雑誌記者諸君、原稿の依頼は凡て手紙で願います。「面会はお断り」と紙に大きく書いて「五ウ」て貼つてある。

秋のひるすぎ

齒入屋はプカリ／＼煙草を吸つてゐる。

共同水道の流しには、近所の山の神が齒入屋女房一を中心にして、井戸端会議の最中である。

女房一 (洗濯をしながら亭主に) 一寸、お前さん、何だね、先刻からプカ〔六オ〕リ／＼煙草ばかりすつてゐるぢやないか。ちつとは働

く気になつたらどうだい。

下駄屋 働きたくつたつて、世間様が働かせてくれねえんだから話にならねえよ。

女房一 馬鹿をお云ででないよ、誰が黙つてゐて仕事を持つて来てくれるものかよ、「齒入屋でござい」つて廻つて歩くのさ、第一そんなにプカ／＼〔六ウ〕やられたら私の吸ふ煙草がなくなつて仕舞ふぢやないか。

下駄屋 判つた、わかつた、(立ち上る) ぢや奥様のいふ事をき、ませふ。

女房一 使ひつけない言葉はおよし、舌をかむよ。

下駄屋 へい／＼齒入でございか。

女房二 本当だよ、稼いだ方がい、よ。

下駄屋 (表へ出る) 齒入屋でござい (下手へ去る)〔七オ〕

女房一 本当に嫌になるよ。

二 うちの人も同じだと、男つて、どうしてあ、かねえ。

三 働く口がないんだよ。

一 それにしても、(春泥の家をさして) あの家は何をしてゐるんだろうね。あたしや、まだ御亭主の顔を見たことなんかないがね。

二 病気なんだとさ。

三 さうかい、どうりで。(七ウ)

二 書いてあるぢやないか。「病中面会謝絶」つて。

一 その字が読めるくらゐなら、何も齒入屋を亭主に持ちやしないよ。

三 で、一体、何をしてゐるんだい、あの亭主は。

二 大江春泥といふ探偵小説だとさ。

三 へえ、そんなものを赫と、おまんまにありつけるのかね。

この会議中に下手から「ハオ」雑誌記者の本田寿夫が出て来て、春泥の家の前に立つてはり紙を読む。

（舌打ちして）又か、いつ来ても、旅行だの病氣中だの、困つた人だ。（台所の方へ来て戸をたたく）もし、今日は（呼ぶ）奥さん、奥さん、おや、奥さんも留守かな（女房等を見て）この家の奥さ（ハウ）んはお留守ですか。

女房二 さあ、知りませんね。

々々一 あたし達は番人ぢやありませんからね。（洗濯物を下手の竿にはし初める）

本田 いや失礼しました。

下手から、春泥夫人が出て来る。この長屋にはさして目立たない程度のいゝ着物、束髪、口「九オ」の側に齒痛の膏薬を張つてゐる。本田は下手へ帰りかける。

本田 （夫人を見送つて）あゝ奥さん。

夫人は聞へぬ振りをして自分の家の台所の側へ行く。

本田 （追つて）博文館の本田ですが、先生は御在宅でせうか。
夫人 病氣で、ねてますの。原稿の用「九ウ」でしたら、わたしが取りつぎます。

本田 一寸でいゝんですが、お逢ひ出来ないでせうか

あなたは御存知の筈ぢやありませんか。うちの人は人に逢ふのが嫌ひなんですよ。その上に病氣で！——もし原稿の事でしたら、わたしが伺つて置きますせう

本田 さうですか。では奥さんにお願ひして置きます。あの、先月号に書いて「二〇オ」頂いた「屋根裏の遊戯」といふ変態小説が、大變に評判がいゝので、正月号に是非、あの調子のものお願ひしたいのですが。

夫人 何枚ぐらゐですの。

本田 なるべく短い方がいゝんですが。せいゝく四十枚までで——よござんす。云つて置きますせう。

夫人 ぢや、御願ひ致します。お出来の頃に取りにまゐります。（二〇ウ）いゝえ、間違ひなく送りますから。

本田 ぢや、さうお願ひします。先生、御大事に。失礼いたします。

本田は下手へ去る。夫人は台所の鍵を明けて這入る。洗濯をしてゐた女房達は見送る。女房一はほし終つて、家の中に這入る

上手から子供一人出て「二一オ」来る。

子供 （駄菓子屋に向つて呼ぶ）おくれ。

下手から齒入屋が帰つて来る。

齒入や 齒入屋でござい

女房二と三は首肯き合つて、女房の一が干して行つた洗濯物をそつと取つて自分の洗濯物と一緒に持つて下手に「二一ウ」去る。

女房一が奥から出て来る。

女房一 （亭主を見て）おや、もう帰つて来たのかい

齒入や いくら声をからして歩いたつて、今時下駄の齒入をする奴は少ないよ。大抵の野郎は靴と来てやがる

女房一 おや（洗濯物を見て）今ほしたうちのがないよ、お前さん、知らな（二二オ）いかい。

齒入屋 知らねえな。

女房一 だから油断もすきもありやしないよ。盗むんなら、家の亭主でも持つて行つてくれ、ばい、のに。

齒入や ひでえ事になりやがった。

女房一（どなる）泥棒々々

暗転（二二ウ）

第一幕（二）

寒川久の書斎

正面の上手には一間ばかりの書棚があつて、本がぎつしりつめてある。下手は窓、折り廻して二枚の板戸。上手は折り廻して壁。その壁に向つて原稿を書くテーブル。その上にスタンドなど。その前に廻転椅子。部屋の中央には、低い丸テーブル、それをかこんで、肘掛椅子二脚が正面と下手に置かれてある。壁には油絵が掛けてある。「二三オ」窓の下にサイドテーブルがあつて卓上電話と数冊の雑誌が置かれてある。

前場から二年後の冬、朝。

寒川 寒川が上手のテーブルに向つて原稿を書いてゐる。
下手の板戸から女中が、茶を持つて出て寒川のテーブルに置く。「」来客をつけるベルの音がする。女中は急いで「二三ウ」下手へ去る。寒川は鳥渡筆を置いて、又書き続ける。直ぐ女中が引返して来る。

寒川 （書きながら）誰だ。

女中 小山田静子さんといふ方でございます。

寒川 （軽く驚いて）えつ、小山田静子。

女中 お通してよろしくございますか。

寒川 あ、「二四オ」

女中は下手に去る。

寒川は急いで書きかける。

下手から女中の案内で丸髻の小山田静子が出て来る。彼女は襟すじが赤くはれてゐて口もとに黒子がある。

寒川 いらつしやい。さあ、おかけ下さい。

静子 突然上りまして―お仕事ぢやござ「二四ウ」いませんでせうか。

寒川 何、いゝんです。さあ、どうぞ（椅子を進める）

静子かける。

静子 先日は手紙の御返事を有難う存じました。

寒川 いや、こちらこそ失礼しました、何か私に御用があたりだとか

静子 でしたが―

寒川 はい、まだ、お目にかゝつてから間も「二五オ」ない、先生に

静子 ろく／＼なことを御相談申上げるのは、余りに礼儀知らずと思ひ

寒川 まして一時は何ひますのを、ひかへておりましたが、もうどう

静子 してもお力にすぎるより、道がないと存じましたので、突然伺

寒川 つた様なわけでございます

静子 ほう、何か私が役に立つやうなことでもあるのですか

寒川 先生ならば、聞いて頂けるやうな「二五ウ」気がしたものです

静子 で―でも―まだお逢ひしてから日数も浅い先生に、こんな打

寒川 割つた御相談をしましては失礼でございますんか知ら。

静子 何です、まあ、おつしやつて下さい。「」貴女に関する事なん

寒川 ですか。

静子 はい、一身上の問題ですの

寒川 一身上の問題―それは大変ですな、わたしに出来ますかな、「二

静子 六オ」

寒川 そりやね、もう先生なら。

静子 あ、さうですか。まあ、どんなお話か兎に角お伺ひませう。

寒川 いや探偵小説などを書いてゐるだけに、又何かと人の考へつか

静子 ない、御返事が出来るかも知れません

寒川 この間に女中が茶を二人に運んで去る。

忘れきつてゐたのでございます。

寒川 いや、判りました。平田さんと貴女との間は充分判りました。

■で……その平田さんから最近来たと云ふ手紙の内容は、どういふのですか。

静子 先生に見て戴かうと存じまして、「二三〇」持つて参りました。(手紙を出す。)それから。あの……先生は……大江春泥と云ふ変態小説家を御存知でいらつしやませうか。

寒川 大江春泥……。え、知つてゐます。いや、個人的につき合つた事はありませんが、同じ雑誌の上で名前を並べてゐました。さう、さう云へば、こゝ二年ばかり、大江春泥の名を見ませんね。が、その大江春泥「二三ウ」が、どうかしたんですか。

静子 はあ。(下を向く)。

寒川 此の、あなたの事件に関係でもあるんですか。

静子 関係があるところではございません。

寒川 大江春泥が、この事件に深い関係がある。大江春泥の「屋根裏の遊戯」いやな、不健康な作家ですね。変態小説なんてよくありませ「二三オ」んからね。

静子 本当に、あの、「屋根裏の遊戯」はいやでございませう。

寒川 あの小説、御存知ですか。

静子 それ丈に、気味が悪いのでございます。先生。どうぞ、私をお救ひ下さいませ。ねえ。先生。(しく／＼泣き出す。)本当に先生に救つて戴かなければ、私はどうなるんでございませう。

「二三ウ」

寒川 さう興奮しちやあいきけません。で、その大江がどうかしたんですか。

静子 私が十八八の時のいたづらの相手の平田一郎が、その大江春泥

なのでございます。

寒川 (驚く)え、。ぢやア、この手紙は大江の手紙なんですね。

静子 はい。(泣く)

寒川 兎に角、拝見しませう。

静子 寒川は、静子がテープ「二三〇」ルの上に置いた手紙を取らうとすると、電話のベルがなるので、寒川は舌打ちして、電話に出る。

寒川 風が吹き出して来る。

寒川 (電話)はあ、はあ。あ、本田君か。僕だ。午すぎ……。む、よからう。行くよ。(切る)。いや失礼しました。おや、風が出て来まし「二三ウ」たね。

静子 静子は、寒川の電話に耳をすます。

寒川 おいそぎぢやございせんか知ら。

静子 いや、何、博文館の本田といふ記者からです。

寒川 博文館の本田さん……。

静子 御存知ですか。

寒川 い、え。

静子 寒川は手紙を読む。「二三四オ」

静子 お読みになれば大抵は判つて戴けると存じますが。……平田さんは、私の仕打を憎んで、恨んで、到頭私に、その復讐をしよと、私を探し廻つたと云ふのでございます。

寒川 それで、たう／＼、貴女の居所をつきとめたから、これからは、あべこべに、貴女を苦しめてやると云ふんですね。(読む)。

静子 『私の小説は、私の心に深き恨み「二三四ウ」が存してゐたからこそ書けたとも云へるのだ。あの猜疑心、あの執念、あの惨虐、それらが悉く私の執拗な復讐心から生れたものだ。』(暫く黙読し

てから。)

えつ、何だつて。(読む。)

『私にとつて、恋人と妻とは全然別箇のものだ。つまり、妻を娶つたからと云つて、恋人への恨みを忘れる私ではない。』(黙読。)

(二五オ)

静子

そればかりではないのでございます。私が、何時に何をしたかまで、すっかりあの男は知つてゐるのでございます。まるで、私の影のやうになつてついてゐたやうに。起きるから、ねる■時まで、その上に、ねてから起きる時まで、……私の外には知らない事までも、すっかり書いてございます。

寒川

こりや、少しひどいですな。(二五ウ)

わたくし、主人側の親類の外には、身内と云つては一人もございませんし、お友達に、こんなことを相談するやうな親身の方はありませんし、本当に、無縁とは思ひましたけれど、わたくし、先生に御すがりすれば、私が、どうすればいいか、お教へ下さるでせうと思ひましたものですから……。

寒川

いや、御心配はありません。こんな(二六オ)打割つたことを御相談下すつたのですから、貴方の私に対する信頼を裏きるやうなことはしません。屹度、何とかしてあげます。

静子

まあ、先生。私、本当に何と御礼を申上げてい、か判りません。先生。私、先生の御厚意がうれしうございますわ。

寒川

それですね。貴方の行動を、こんなにまで仔細に大江が知るのが(二六ウ)第一変ですね。貴女の家の召使が、彼に買取されてゐるんぢやないんですか。

静子

いえ、召使達は気心の判つた、長年住込みのものばかりでございます。

寒川

ぢやア、大江が、あなたの家の中に身をかくしてゐるんでせうか。

静子

主人が十人一倍神経質の方で、可成り癖や戸じまりも嚴重に出てを(二七オ)ります。

寒川

いや、よござんす。大江は、たかゞ探偵小説家ですから、手紙の文章で貴女を怖がらせる位なものですよ。が、まあ、貴女の安心の行く様にしませう。先づ、その大江の居所をつき止めることですね。

静子

その居所が判りませうか。いろ／＼のつてがありますから、その点は大丈夫です。(二七ウ)

寒川

(自身信ありげに) 同封の消印が、皆ちがつてゐるくらゐでございますが、居所が判りになりますか知ら。

寒川

まあ、私に任せて下さい。兎に角あの男は、私に取つても小説の立場としての仇ですから。屹度、さがして見せます。

静子

有難うございます。それでは……(立つ) それからあの、も一つお願(二八オ)ひがあるのでございますが……

寒川

かうなれば、何でもよござんすから、云つて下さい、何です？あの、この事はどうぞ、警察や探偵の手にかけないやうにお願い

静子

したいのでございますが、もし、それが表沙汰にならないにしましても、主人にでも知れますと大変でございますから……。

寒川

それも承知しました。(二八ウ) あ、私、本当に救はれましたわ。では先生、呉々もお願ひ致します。どうぞ女一人の生命を助けると思召して……(礼をする)

静子

どうぞ奥様に……

寒川

は、は、は。先刻お話しした通り、まだ独りですよ。まあ、つい。失礼申しました。

静子

静子は色つぼく札をして下手から去る。(二九オ)
寒川は送りに去る。

入れ違ひに女中が茶を下げに出て来て、去る。

寒川 あゝ、寒川です。本田君を……。先刻は失礼。君に是非、たの
みたい用があるんだ。すぐ逢つてくれないかね。時間の都合は
どうだね。直ぐ。三越の屋上しよう。たの(二九ウ)む。直ぐ
……(切る)。

——暗転——(三〇ウ)

※余白(三〇ウ)

第一幕(三)

三越の屋上運動場。

正面の中央にベンチが置かれてある。その下手上手には滑り台や、重
量測などがある。正面の後は、三越の屋上から見たビルデイグ街。広
告の軽気球などが飛んでゐる。

滑り台には、子供が二人ばかり遊んでゐる。買物を
した婦人が、子(三二オ)供の手をひいて下手から上
手に行きすぎる。上手から寒川と本田が、オーヴァー
の襟を立て、話しながら出て来る。

本田 けれど先生、そりやひどいですね。わけも離さないで大江春泥
の居所を探せは。

寒川 いや、それが、何分にも絶対の秘密を必要とするんでね。(三二
ウ)

本田 ぢや、まあ、仕方ありませんね。
寒川 で、春泥の私生活は、どうなんだね。

本田 ところが、それが判らないんですよ。雑誌記者や、新聞記者の

仲間でも、春泥に直々逢ふのは余つ程の腕の奴で、あたしなん
かも一度しか逢ひませんでしたからね。それも、あの先生は床
の中にゐて話をしたんですからね。(三三オ)

随分、無精な男だね。

兎に角、変人ですね。

さうすると、原稿の用はどうするんだね。

本田 ですから、大抵は手紙で済ませるんですよ。さうすれば、奥さ
んが、先生に伝言をして置いてくれますからね。これは実に慥
かですからね。

寒川 ほう、内助の功、よろしきを得てぬ(三三ウ)るわけだね。

本田 けれど、もう茲二年間といふもの、少しも書かないし、従つて
手紙も出しませんし、奥さんにも逢ひませんし、さあ、何処に
ゐるか鳥渡これは六ヶ敷い役ですね。わたしが最初に奥さんに
逢つたのは、……さうく二年前の秋で、須崎町の裏だなで、
何でも共同水道が台所の前にあつた家ですよ。その時(三三オ)
も、表には「病中面会謝絶」なんて書いてありました。

すると、変人で人に逢ふのが、余程嫌ひなんだね。それから、
と。気味は春泥の字を鑑定出来るかね。

それならお手のものですよ。それにあの先生の文章は一風変つ
てますからね。鳥渡真似が出来ませんよ。

本田 (静子から受取つた手紙を出して)(三三ウ)こ、の所なら読んで
もい、から見せよう。(本田に渡す) どうだね、本物かね。

(手紙を見る)本物ですね。確かに春泥先生の手ですね。それに
文章の調子までそっくりです。このネチくした文章で、例の
変態小説を書くんですからね。

寒川 兎に角、大切な用事で、是非、春泥の居所が知りたいんだから頼む。(三四オ) ねえ君。これを探してくれたら、僕は本当に恩に着るよ。

本田 そんな大切な事件なんですか。承知しました。何とかして探して見ませう。

寒川 屹度だぜ、至急にね。

本田 ところで、探し当てたら、何かおこつて貰へますか。

寒川 探し当てゝる前に何でもおこる。

二人は何か話しながら(三四ウ) 下手へ去る。

飛行機の音が聞える。子供達が「飛行機だ。」と叫んで滑り台の上に昇つて空を見る。

下手からモダンガールが二人笑ひこけながら上手へ去る。

幕——(三五オ)

※余白(三五ウ)

第二幕

(一) 小山田静子の部屋。

山の宿。大川に面した家。日本間。正面は窓で、その窓からは、低いコンクリートの上に、ビールの端片を、忍び返し代りに置いた塀を距つて、大川が見える。

上手は襖。ついで壁。壁の前には箆笥。小さな机。その上にスタンドや雑誌など。下手は壁で、折り廻して出入の襖。窓の側には鏡台。壁には乗馬用の鞭が掛つて(三六オ) ゐる。

前場から三日後の夕暮れ。

豆腐屋のラツバの音。

女中が来客の仕度をしてゐる。やがて下手の廊下へ去つて、直ぐ寒川を案内して来る。

少々お待ち下さいまし。

仲々いゝお住居ですな。

どうぞ。(火鉢を進めて、下手へ去る)(三六ウ)

入れ違ひに静子が丸髷で、派手な和服で出て来る。

先日は失礼申しました。

いや、私こそ失礼しました。突然どうしたんです。例の大江春泥の問題ですか。

はい。おいそがしいところを、電話で、わざ／＼お呼び出しまして申し訳がございません。それに、こんな(三七オ) 部屋へお通し申しまして……。

いや／＼。この方が気が置けないで却つて話が出れます。電話の御様子では、大分あわて、おいでの様なので、驚いて飛んで来たんですが。

丁度、主人も留守なので、また、御相談に乗つて頂かうと存じまして。

さうですか。ぢや、矢張り此の間の問題なんですね。その後どうしました?(三七ウ)

(箆笥から手紙を取り出して) これを御覧下さいまし。(寒川の前に出す。)

また来たんですか。

寒川は手紙を読む中に静子は、しく／＼泣き出す。

いよく、彼らしいことを云ひ出しましたね。あいつ、小説を書いてゐるわけぢや、あき足りないと見え(三八オ) ますね。

静子

あの人は、大江さんは、わたしを虐めて、いぢめて、虐め抜いて殺さうと思つたが、お前達夫婦の仲を見せつけられるに及んで、お前を殺す前に、お前の大切な夫の命を、お前の目の前で奪つて、その悲しみを充分に味はせてから、それから、ゆつくりお前の命を貰ふと云ふのでございます。(三八ウ)

しかも、この文章の惨酷な書き方には驚きましたね。(読む。)

「現に今、お前がこの手紙を読んで震えてゐる様子まで、お前の影である私には見えるのだ。」

身慄ひして左右を振りかへつて見る。

静子

たう／＼、主人の命まで取らうと云ふのでございます。

寒川

む、だが……然しですね……。(三九ウ)

静子

いえ、先生はこれを小説家の亡想到過ぎないと、私に気休めを仰しやるのでございませう。けれど、けれど……先生、こんな事を三日にあげず云つて来られては、女は、女は……とてもちつとしてはゐられませんわ。不意に殺されたり、暴行を加へられたりするのよりは、もつと、もつと惨酷な攻め方ですわ。あ、私、頭がどうかしたのでは(三九ウ)ないかと思ひますわ。小さい時から散々苦勞をして両親をなくなして、二年前に、やつとロンドンから帰つて来た小山田と、かうして静かに暮せるやうになりましたら、今度は、こんな、くらい影に攻められ……。

しやくり上げながら、しく／＼泣く。

寒川

いや、全く、あなたのおつしやる通(四〇ウ)りです。わたしも、もう一寸のがれの気やすめは云ひますまい。そこで奥さん。

尚、静子は顔をふせて泣いてゐる。

寒川

困りましたね。泣いてゐちやア……さあ。

寒川はいくらだましても肯かないので、途方にくれて黙つてしまふ。(四〇ウ) 静子は、その静かな中で、

しく／＼泣いてゐる中に、ふと泣くのをやめて、顔をあげて、天井の方に耳をすませて聞く。寒川は不審に思つて静子を見る。

寒川

ど、どうかしたんですか。

静子は手を横に振つて、静かにしろと目で知(四一ウ)らせる。寒川は静子と同じやうに耳をすまして物音を聞く。

寒川

何か聞えるのですか。

静子

お判りになりませんか？ 天井で時計のセコンドを刻む音が……。

寒川

えつ。(耳をすまます) 聞えませんか。貴女の空耳ぢやないんですか。

静子

い、え。(耳をすままして) ほら、ほら。カチ、カチ、カチ……。

寒川

あら、やみ(四一ウ)ましたわ。(尚、耳をすまます) 空耳ですよ。

静子

(耳をすままして) い、え、ほら、また聞えはじめましたわ。ね、カチ、カチ、カチ……。

寒川

(立ち上つて聞き耳を立てる。) さう云はれて見ると、聞えるやうな気もしますね。

寒川

段々暗くなつて来て、電灯が急につく。(四二ウ)

寒川は、それに驚くが、静子は驚かないで、寒川を

見ながら、聞き耳を立て、ゐる。

静子

(突然、恐怖的に) あ、さうですわ。大江さんが屹度、此の天井に這入り込んで、わたしを見てゐるのですわ。屹度、屹度……

(尚聞き耳を立て、恐怖的に声をたてる。) あ、先生。(物におび

え〔四二ウ〕たやうに寒川にかじりつく。〕

寒川は、静子を抱いて天井を見てゐる。

静子は寒川に抱かれて、寒川の顔を見てゐる。寒川は、ふと目を下げて抱いてゐる静子と視線を合はして気がつく。

寒川 あつ、失礼しました。（抱いてゐる手をはなす。）〔四三オ〕

静子 〔尚、寒川の手を握つて。〕先生……（シク／＼泣いて、寒川の胸に顔をおしつける。）

寒川 さあ、そんな駄々つ子のやうなことをしてゐちゃ駄目です。（決心して。） よろしい。天井へ上つて見ませう。

静子 〔驚く。〕まあ、先生……。

寒川 天井へ上つて、兎に角、調べて見ませう。

静子 でも、もし、天井に大江さんがあま〔四三ウ〕したら大変ですわ。あの人のことですから、ピストルか何か持つてゐるかも知れませんわ。

寒川 いや、大丈夫です。（上衣をぬぐ。）人の来る物音がすれば、蛇と同じに逃げて行きますよ。

静子 でも、天井へ……。

寒川 御心配はありません。何、たゞ鳥渡きたないでせうがね。

静子 ついひと月ばかり前に、あく洗ひ〔四四オ〕はしたんですけれど……

寒川 暮の大掃除の時にですか、ぢや、たいしてよごれてもゐますまい。それでも……。

静子 え、と、天井へは何処から上るんです。

寒川 （下手の出入を指して）伝奇やは、あちらの物置から上つてゐましたけれど、先生、大丈夫でございませうか。〔四四ウ〕

寒川 まあ／＼、まかせてお置きなさい。

寒川は下手に去る。

静子もついて這入る。

やがて、静子丈で戻つて来る。和室の電灯の下に座つて下を向いてゐる。天井から寒川の声がする。

寒川 奥さん。奥さん。誰もゐませんよ。だが成程、人がゐたらしい跡があり〔四五オ〕ますね。

静子 時計が落ちてはをりませんか？

寒川 い、え。何にも……。

静子は黙して下を向つて座つて物におびえるやうに泣いてゐる。

暫くして寒川が上手から出て来る。

寒川 （洋服をはたきながら）別に変つたこともありませんね。が、何か〔四五ウ〕ゐたらしい様子がありませんね。

静子 （立つて寒川の方へ行きながら）ぢや矢張り、あの人がゐたんですわ。

寒川 （静子の顔をちつと見て）奥さん。あなたの襟すじの、はれ上つた疵は、それはどうしたんですか。

静子 〔驚いて。〕まあ。（黙つて下を向く。）

寒川 天井から、貴方を見て、はじめて〔四六オ〕発見したんですがね。（窓ぎわを歩きながら）いや、探偵のやうなつもりで見ると、

いろいろな物が目にとまるんですよ。（ふと、壁に掛つてゐる乗馬用の鞭を見て。）ほう。御主人は馬にお乗りになるんですか。

静子 い、え。

寒川 乗馬はなさらないんですか。（壁の鞭を取つて見る。）〔四六ウ〕
寒川 何に、おつかひになるんでせうな。

静子 さあ、存じませんわ。(寒川の顔を見てから下を向く。)

寒川 壁飾りですか。

静子 さうでございます。

寒川 (鞭を元の所へかけて)とこで、奥さん、天井で妙なものを拾

ひましたよ。(ポケットからボタンを出す。)何かのボタンです

ね。(静子に、そのボタンを渡す。)見覚えは(四七五)ありませんか。

静子

寒川 さあ……(考へる)

静子 ボタンのマークを見ると、これは日本のモノぢやありませんね。

寒川 (考へて。)あ、さうですわ。これは確かに主人の手袋のボタ

ンですわ。さう云へば主人ゆは此の頃、あの外国から買って来

た手袋をちつともはめてるませんわ。あの手袋のボタンが、ど

うして天井裏に落(四七五)ちてゐたのでございませう。

寒川 兎に角、これは唯一の証拠物ですから、私がお預りして置きま

せう。然し、不思議ですな。御主人の手袋のボタンが天井裏に

落ちてゐる……しかも、その手袋は近頃見ないと……。む、

あの大江の奴、他、他人に罪をなすりつけるために、御主人の

手袋を盗んだな。

静子 あの人のごとでございませうから、そ(四八〇)のくらゐの事は致

すかも知れませぬ。

寒川 で、ですね。今夜から、何かの口実をつくつて、貴方も御主人

も、向ふの西洋館へおやすみになるんですね。何しても日本間

は天井の板のすきから、下が見えますから、此の部屋なら、

天井が、此の通り塗つてあるから大丈夫でせう。

静子 では、さう致しますわ。何から何ま(四八〇)で申訳御座いませぬ。

寒川 さあ、ぢや、今日はこれ丈けにして置ませうか。

静子 もう、お帰りでいらつしやいますの。

寒川 (上衣を着ながら)鳥渡、書きかけた原稿がありますから……

いや、それに御主人でも、お帰りになるといけませんから、引

きあげませう。

静子 はあ、主人には内証にして置きた(四九〇)いと存じます。では、

自動車を呼びますわ。(下手に行きかける。)

寒川 いや、いゝんです。そこらで拾ひますから。

静子 うちの頼みつけがございますの。(下手へ去る)

寒川 は部屋の中を見廻す。が、また妙に鞭が気にな

つて、取つて見て、一つぴしりと打つて(四九〇)見

て、鳥渡あたりを気づかふ。下手から静子が出て来

て、寒川が鞭を持つてゐるのを見る。

静子 自動車クルマがまゐりましたわ。

寒川 (驚いて、鞭を壁にかけろ。)あ、さうですか。

静子 そんなにその鞭が気になりました……？

寒川 いや、なに……。ぢや、失礼します。(五〇〇)

寒川は下手へ去らうとする。静子はそれを送つて行

く途中で、静子は、わざ／＼つまづく。寒川はそれ

を働こける。

寒川 あつ、あぶない。

静子 何ですか、頭が重いので……。

寒川 大丈夫ですか。

静子 え、大丈夫ですわ。

二人は下手に去る。(五〇〇)

やがて、静子は引返して来て、机に向つて、ペンと

インクで何か書き初める。暫くの間。下手の庭づた

ひに、寒川がオーヴァを着たまゝ、女中に案内されて話しながら、青木運転手をつれて、あわてて出て来る。〔五一オ〕

寒川 (女中に。) おゝ、大掃除は、確かに十二月の二十四日だったんですね。

女中 はい、間違ひはございません。

寒川 (呼ぶ。) 奥さん。

静子 (はつとして。) 誰、どなた、あゝ、先生でございましたか。

寒川 いや、おどかして済みません。鳥渡見て下さい。(手袋を出す。) 此の手袋は御主人のですか。

静子 (見て驚く。) まあ、これが何処〔五二ウ〕にございまして。確かに主人でございます。

青木 これは、去年の十一月の二十八日にこちらの御主人に戴いた品なんです。

寒川 確かに、十一月の二十八日と、どうして判るね。

青木 あれは確かに二十八日でした。何でも帳場から月給を貰つた日に、此の手袋を頂いたと申がんで、今日は〔五二オ〕貰ひ物をする日だと思つたことがありますから、さうです。確かに二十八日でした。

寒川 むゝ、君は、それを裁判官の前でも、はつきり云へるね。

青木 裁判官の前ですつて、冗談ぢやありません。けれど十一月二十八日には間違ひはありません。

静子 えゝ、此の青木さんは、主人をいつも乗せる運転手さんですか、〔五二ウ〕或は主人がそれをこの人に上げたかも知れませんか。それは主人が戻りませば判りますわ。

寒川 さうすると少し変だぞ。

静子 何がございませぬ。

寒川 女中さんは大掃除は十二月二十四日だと云ふ。貴方も十二月の二十四日だと云はれてゐる。ところが、その前の十一月二十八日に、此の手袋は此の運転手さん野手に渡つて〔五三オ〕ゐた。……さうすると……。

静子 けれど、先生、どうして、その手袋が主人のだとお判りになりまして。

寒川 先刻の、あのボタンが目じるしでハンドルを握る手袋に目が届いたんですよ。

青木 手袋のボタンですか、それは御主人から戴いた時に、とれてゐたんです。

寒川 すると、あの拾つたボタンは、掃〔五三ウ〕除後で、しかも手袋が人手に渡つてから、落したものだな。

静子 あゝ、さうなりますわね。変だな。

寒川 何がですか。 (青木に) どつちにしても、この手袋は改めて君から買はう。

青木 この使ひ古しをですか。 むゝ。

寒川 どうも、そりや……。〔五四オ〕

静子は絶えず寒川を見てゐる。青木と女中は煙にまかれてゐる。

—— 暗転 ——〔五四ウ〕

第二幕

(二) 吾妻橋下汽船発着所。

舞台の中央から下手半分は、奥から前づらに往復の道路。その道路から上手へ向つて、汽船発着の棧橋へ渡してある橋。その橋の下は隅田川の流れ。

橋の袂には切符を売る小屋がある。道路には、二本ばかりの枯柳が立つてゐる。

正面には吾妻橋が見える。

前の場の翌日の朝。(五五ウ)

橋の袂に弥次馬が、大ぜい上手を見て騒いでゐる。

巡查(一)が、その人達を橋の袂で追ひ払つてゐる。

巡查一 何でもない、何でもない。見るもんぢやない。

弥次一 何だ、何だ。見投げか。

弥次二 人殺しらしいぞ。

弥次三 いや、喧嘩だとさ。(五五ウ)

弥次四 やい、押すなよ。

巡查一 船へ乗る者の外は、みんな向うへ行つた、行つた。

弥次馬は口々に勝手なことを云つてゐる。

巡查一 もう済んだ、すんだ。

弥次馬は、一人去り二人去りして皆みなくなる。(一)

汽船に乗る若い女が、切符を買つて、(五六ウ)橋を渡つて上手へ去る。橋の袂の新聞の売子が、弥次馬がゐなくなると、鈴を鳴らし初める。

上手から、巡查二が、第一幕第三場のモダン・ガール二人を連れて、橋の上に出て来る。

巡查二 で、お前達が、あの死体を見つけたのだな。(五六ウ)

モガ甲 さうなんだわ。今朝この人と、此処で待ち合せて、向島の百花園へ遊びに行かうと思つたのよ。

巡查二 百花園へ二人きりで遊びに行くのか。さうぢやあるまい。男は先へ行つて待つてゐるんだらう。

モガ乙 失礼しぢやふわ。(甲に)ねえ。そんなことまで。

モガ甲 恋愛は法律や規制の外にあるんですもの。(五七ウ)

巡查二 そんなことは、どうでもいい、どつちが見つけたんだ。

モガ甲 あたしだわ。二人で船を待つてゐたら、何だか棧橋へぶつかる

物があるんで、ちつと見てゐると、それが、どうも人間らしい

んだわ。

モガ乙 あんたに云はれて、あたしも驚いちやつたわ。

巡查二 それで直ぐ此の汽船会社の者に知らせたんだね。(五七ウ)

モガ甲 だつて黙つてゐる訳には行かないでせう。

巡查二 勿論だ。兎に角、もう少し、詳しく調べる必要もあるだらうから、君達の住所と姓名を聞いて置かう。

モガ甲 (乙と顔を見合せて。)いやねえ。

巡查二 そんなことを云はんで。

巡查二は二人のモガから往住所と姓名を聞いて、手帳に書きつけて(五八ウ)ゐる間に、上手から橋を渡

つて、小山田静子が、巡查三のあとについて、しほ

くゝと出て来る。

巡查三 それで、あの死体は、確かに君の亭主なんだね。

静子 はい。確かに小山田六郎でございます。

巡查二 む、何しろ、もう死んでから、大分時間が経過してゐるやう

なので、(五八ウ)どうにも手のつけやうがないから、気の毒だ

が、まあ諦めて貰ふんだね。

静子 あのだ…他殺でございますでせうか。自殺でございますか。

巡査三 水を飲んでゐないところを見ると、他殺の疑ひが充分あるね。

静子 (驚いて) 他殺…。

巡査三 それに、背中に、何かでえぐつたらしい疵があるからね。「五九〇」

静子 (震え声で) あのだ…それぢや、誰かに殺されたんでございませうか。

巡査 どうも、さうだらうな。

医者 (静子に。) お気の毒ですが、いけません。

静子 (驚く。) 矢張り…あゝ。こんな、こんなことになるとは思ひません。「五九〇」でしたわ、矢張り、矢張り、油断してゐたからでした。屹度、屹度、あの人の仕業ですわ。

巡査一 何が、お前に心当りでもあるのかね。

静子 (泣きながら。) ございます。ございますわ。主人は昨夜六時頃から、小梅町の友達の家へ、碁を打ちに行くと言つて出掛けたきり、今朝まで帰りませんでした。屹「六〇〇」度、その行きか、帰りか、あの人に殺されたんですわ。

巡査三 そんなことを、こゝで云つても仕方がない。どつちにしても、鳥渡一緒に来て貰はう。

静子 はい。何処までもまゐります。私、どうしても、主人の仇を取つて戴きます。

巡査一 さう興奮しちやいかん。さあ、来給へ。「六〇〇」

静子 (医者を見かへつて) どうしても、いけませんでせうか。

医者 何しろ背中の左肺部に致命傷を受けてゐる上に、さう、水へ這入つてから、かれこれ、十時間近くはたつてゐますから…。

静子 殺すにしたところで、こんな所で、こんな殺しやうは酷うござ

いますわ。

巡査三 さあ、泣いぢやいかん。来なさい。「六一〇」

巡査二 (モガ二人に) 君達は、よろしい。

モガ甲 気の毒ね。

モガ乙 ほんとにね。

いつの間にか、また弥次馬が寄つて、これ等の人々を囲む。

巡査等は、「どいた、どいた」と叫びながら、静子をつれて下手へ。医者と共に去る。弥次「六一〇」馬達も散る。

モガ甲 あゝ、朝から嫌ね。

モガ乙 ねえ、大変よ。彼氏、屹度、欠伸をして待つてゐるんだわ。

モガ甲 いゝさ。ランデヴーの男は、一時間や二時間、待つてゐるさ。

あれ、鳥渡トつポイからね。オン、タイムになんか行くと増長してよ。

モガ乙 それも、さうね。

上手で「チンくチン」と「六一〇」汽船の出の笛が鳴る。

モガ甲 あつ、出るわよ。

モガ乙 (呼ぶ。) 待つてえ。

(モガ二人は上手へ駆け去る。新聞の売子が一調子張上げて、鈴をならす)

売子 新聞…新聞。

上手で汽笛が鳴る。

——暗転——「六一〇」

第二幕

(三) 小山田の家。

第二幕第一場と同じ。

前の場の翌日の夜。

誰もゐない此の部屋へ、下手から刑事二人と糸崎検事とが、這入つて来て、部屋の中をいろく〜と探し廻はる。

刑事(一)と(二)は抽出しか〔六三〇〕ら本だの日記帳だのを取り出す。

糸崎 あつたか。

刑事一 ありました。

糸崎 何だ？

刑事二 日記帳です。それと、これです。(単行本を見せる)

糸崎 む、こんなことたらうと思つたよ。他にはないかね。

刑事一 (机の抽出しから) こゝにも何か〔六三ウ〕ありました。

糸崎 (側へ寄つて) 例の手紙だな。む、この位でい、だらう。

糸崎 検事を先頭に刑事は証拠品を持つて下手へ去る。

それを見送つて上手から寒川が出て来て、刑事等のあとを追はうとするのを、慌て、静子〔六四オ〕が寒

川を引きとめる。

静子 まあ、先生。ねえ、お願いです。お願いですから、もう少し待

つて下さい。

寒川 静子さん。いえ、奥さん。貴女は私に嘘を云ひましたね。

静子 嘘を……どんな嘘ですの。

寒川 貴女は、貴女は恐ろしい人だ。一昨日の夕方、私を此処へ呼び

つけて、天井に時計のセコンドを刻む音が聞えると云ひました

ね。人のい〔六四ウ〕い私は、それを真に受けて、わざく、ほこりだらけの天井裏に上りましたが、手袋のボタン丈で、他には何にもありませんでした。

静子 けれど、先生も天井に時計のセコンドを刻む音が聞えるとおつ

しやいましたわ。

寒川 ですから、ですから、あれは嘘だつたんですね。

静子 それが、今お判りになりました？〔六五オ〕

寒川 ちや、矢張り……。

静子 ねえ、先生。けれど、けれど先生は、恐れてゐる私を、その腕

で、力強く、しっかりとお抱きになりましたわね。

寒川 そりやあ……

静子 先生。先生だつて、多少は何かを私にお望みが、あつたんぢや

ございませんでしたの？

寒川 (馬) 馬鹿をおつしやい。〔六五ウ〕

静子 で、春泥の居所が、お判りになりました、大江の居所が……。

寒川 判りません。警察でも判らないさうです。

静子 では、貴方は、まだ、そこまでは御存知ないんですね。

寒川 えつ、何ですつて？

静子 もう私、何もかも申し上げます。春泥は、小山田が二年前に帰朝

したと同時に、ばつたり名をかくした〔六六オ〕ことに、お気づ

きになりました？ ねえ、そこまで、深くお考へになりました？

寒川 ちや、貴女は春泥の居所を知つてゐるとでも云ふんですわ。

静子 え、存じてゐますわ。

寒川 (驚く) え、。

静子 この家にゐますの。

寒川 天井裏ですか。もう、その手には乗りませんよ。〔六六ウ〕

静子

天井裏ぢやありませんわ。この部屋にをりますわ。春泥は、何処故人に逢ひたがらなかつたか御存知ですの。

寒川

そんなことまでも、貴女は知つてゐたんですね。

静子

当り前ですわ。自分のことは、自分が一番よく知つてゐる筈ですわ。

寒川

自分？

静子

春泥は……、実は私ですの。「六七〇」

寒川は静子の顔を見守るのみ。

静子

(やさしく)お驚きにならないで下さい。私は、とても、とても普通の人のやうにしてはゐられなかつたんですの。主人の小山田が外国に行つてゐる留守の間、ふとしたことから、大江春泥といふ名で、探偵小説を書いて見たんですの。さうすると、それが殊の外に当つて、それ「六七〇」から、それへと原稿の依頼が来るので、私は、到頭世間から一個の大江春泥にされて仕舞ひました。さあ、さうなると、持前の変な病気が頭を持ち上げて、わざ／＼家まで別に借りて、世間がこしらへてくれた椅子に、世間を偽つて座つてゐましたの。ところが、二年前に主人が帰朝してからは、もう世間を偽つてゐる時間がなくなつて仕「六八〇」舞ひましたの。

寒川

ぢやあ、ぢやあ、あの、「屋根裏の遊戯」を書いた春泥は、貴女なんですね。

静子

はい。(下を向く。)

寒川

それにしても、それにしても、あの例の、貴女を恐怖の中に置いた、あの手紙は、一体どこから来たのです。

静子

あれも、私が書いて、私に宛てまし「六八〇」たの。

寒川

それを、それを、私に恐れ戦いて見せて、私に当の貴女を探さ

静子

せることを、面白がつてゐたんですね。私が貴女と一緒にあなつて恐れてゐる様子を見て、貴女は、心の中で笑つてゐたんですね。

けれど、けれど、さうでもしなければ、貴方に近づくことが出来ませんでしたもの。手段は、どうあつ「六九〇」ても、それで貴方は、恐れてゐる私を抱いて下さいましたわね。わたしの為に、天井裏まで這つて下さいましたわね。ゴミだらけの中から、小さな手袋のボタンまで見つけ出して下さいましたわね。私、こんなにまでして下さる貴方に、より以上の厚意を持たないでゐられませうか知ら。悪いと知りながら、あらゆる手段をめぐらすの。けれど、それが、皆、今考へると、不健康な、いやらしい、まるで陰獣のやうなやり方でしたわ。いくら、もがいても、あせつても、この不健康な着物をぬぎ捨てることが出来ませんでしたの。情ないと思ひますわ。かうして饒舌つてゐる一つ一つの言葉の中にも、屹度、まだ妙な毒があるやう「七〇〇」にさへ思へてなりませんの。或は、これが私の本性なのかも知れませんわ。

寒川

貴女は、貴女は恐い人だ。

静子

小山田も、たう／＼死にましたわ。先生、これから先生を、あなたと呼ばせては下さいませんか？(寒川の側へ寄る)

寒川

側へ来ちやあいけません。私の身体へさはらないで下さい。「七〇〇」

静子

これ程、これ程にしてゐる女を、貴方は矢張りお見捨てになるんですの。ぢや、あの昔の通り一べんの女のやうに、お人形のやうな、魂の抜けた女の方が、およろしいの？(つか／＼と洋

室へ行つて、鞭を持つて来て）さあ、貴方。私を打つて下さい。打つて、打つて、打ちのめして下さい。貴方が天井から御覧になつた時の、私の襟筋のはれ〔七一オ〕を、もつと大きくして下さいまし。

寒川 （震へて）陰獣……。

静子 ぢやあ、私は、もう、誰にも可愛がられることは出来ませぬのね。そんな幸福よりは、御主人の冥福を祈る気にはなれませんか。

寒川 えつ、主人の冥福……。

静子 御主人は、昨日の朝、吾妻橋で、何者かに殺されて、水の中に浮いてゐたと云ふぢやありませんか。〔七一ウ〕

寒川 存じてゐます。主人は、一昨日の晩、あの窓（後の窓を指す）

静子 から落ちて、コンクリートの上の硝子のカケラに背中を打つて、

寒川 大川へ沈んで、昨日の朝、吾妻橋下に流れつきましたの。

静子 御主人の死ぬ時を、知つてゐるんですね。御主人はお酒にでも

寒川 酔つてゐたんですか。

静子 さあ、それは、貴方の、やさしい、〔七二オ〕親切さに、お聞きになつて下さい。

寒川 ぢや、御主人は貴女が……。

静子 下手が、騒がしくなる。

あ、たう／＼私を捕へに来る足音がして来ました。あ、私、私どうしたらいいのでせう。先生、先生、私、自分のしたことが、こんなにまで大事になるとは思ひませんでした。（部屋の中をうろ／＼する）先生。（寒川にかぢりつく。）私の〔七二ウ〕身体をどうにかして下さい。殺して下さい。

寒川 （静子を振り捨て、）勝手になさい。

静子はぢつと考へて何か決心して、寒川を引張つて、

窓の方に行く。

寒川 な、なにをするんです。

静子 あなたと一緒に死ぬんです。

静子は寒川と一緒に〔七三オ〕窓から川へ飛び込まうとする。

寒川はそれを拒む。

二人は窓の処で争ふ。はづみに静子は忍びがへしのビールの破片に胸をついて仕舞ふ。

寒川 （おどろく）ど、どうしたんです。（見て驚く。）あつ……奥さん、奥さん。〔七三ウ〕

静子 下手から、先刻の刑事二人と、糸崎検事と、本田記者が這入つてくる。

寒川 先生、先生。

本田 （静子を指す。）

寒川 刑事等は駈け寄つて見る。

刑事一 硝子の破片で胸をついたやうです。

検事 悪いと知つて、たう／＼自滅か。〔七四オ〕亭主と同じところで、同じやうに死ねば、亭主も気が済むだらう。

本田 （静子を後から抱き起して）先生、この顔に洋髪を乗せて、歯痛

寒川 の膏薬をはればどうです、大江春泥夫人になりますよ。えつ。

本田 一人三役といふ陰獣ですよ。

寒川は下を向く。

他の者は顔を見合は〔七四ウ〕せる。

——幕——〔七五オ〕

*付記 本資料の翻刻・紹介をお許しくださつた立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センターにお礼申し上げます。なお、本研究はJPS科
研費22K0136の成果の一部である。
(ことう りゅうき 立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター)